

大学生の国際意識

—英語ができない日本人社会における多文化共生とは?—

沼 穂高 (東京大学教育学部)

■要約

- ◎多文化共生社会における「内なる国際化意識」を高めるために必要な大学教育について、学生の英語力を軸にしながら、現行の国際教育と「協力型授業」とを対比的に取り上げて分析した。その結果、以下の知見が得られた。
- ◎「国際性=英語力」という固定観念にとらわれがちな学生は多い。国際キャリア志向など外向きの国際意識だけでなく、多文化共生社会に必要な内なる国際化意識さえも、英語力の影響を強く受ける。
- ◎大学生の内なる国際化意識を高める手段として、大学における国際教育が考えられるが、その効果は学生の英語力に左右されている。学生の英語力が高ければプラスの効果があるが、低ければあまり効果がみられない。
- ◎大学の授業内／外でバランスのよい活動を行い経験の多様性を高めることが、特に英語力の低い学生の、内なる国際化意識の向上に繋がる。現在の大学教育においては、協力型授業のような授業形態が、経験の多様性を高める役割を果たしうる。

1 問題設定

本稿の目的は、日本の国際化の特徴をとらえ、多文化共生の実現に向けての大学教育のあり方を考えることである。

日本において「国際化」が叫ばれて久しい。矢野(1986)は国際化の要素として、①「いまの世界のことを意識する同時代感覚」、②「世界を中心と辺境とが複雑に交錯する空間としてとらえる地球感覚」、③「さまざまな民族文化の尊厳を配慮する異文化理解」、の3点を挙げている。Reischauer(2004)は、日本人が真の国際人になるには、特異な地理的環境や歴史による独自性と表裏一体の「排他的意識」を緩和させる必要があると述べている。

また日本の若者の国際意識は近年、海外への留学者数の減少と絡めて「内向き志向」と批判されることが多い。「グローバル化時代にもかかわらず、日本の若者には国境を越える勢いが見られない」(『朝日新聞』2011.1.9)、「(筆者注：内向き志向の)精神の改革が必要」(『読売新聞』2011.1.8)などの言説がみられ、文部科学省は『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を策定し、英語を身につけ積極的な海外進出による内向き志向の打破、いわば外向きの国際化を推し進めている。

しかし、法務省の登録外国人統計および出入国外国人統計(いずれも2010年)によれば、

日本における外国人登録者数が210万人、年間の入国外国人数が910万人にもものぼる現在、日本から世界に出ていく意味での外向きの国際化の一方で、世界から日本に入ってくる意味での「内向き」の国際化、すなわち「内なる国際化」(“internal internationalization”) (Tsuneyoshi 2010) も十分に踏まえる必要があるだろう。Tsuneyoshiによれば、在日韓国朝鮮人、アイヌやニューカマーなど多様性が高まる中、日本国内において特徴的だった従来の<日本人/外国人>という二分的な枠組みを越えた新しい社会認識が広まりつつある。このようにグローバル化に伴って日本国内でも多文化共生の必要性はますます高まり、それに対応した意識変革も求められている。

しかしながら、大学生の国際意識を分析した早矢仕(2009)によれば、大学生の「国際性」の意味は語学力、特に英語力強化に偏っている。つまり一種の英語の呪縛に囚われている日本人は、視野の拡大や多様性の許容など「内なる国際化」に必要な要素を見落としてしまい、英語が多文化共生社会を進めていくうえでの障害になっているのではないか。

以上の問題関心から、本稿では内なる国際化に対応するための市民的な国際意識を「内なる国際化意識」と定義し、特に学生の英語力の高低による比較を意識しながら分析を行う。早矢仕(2009)が述べているように、「英語」と「国際」が密接に結びついている日本人は、英語力が低いと国際的なことに目が向かず国際意識を高めることが難しいと想像される。そのような英語力の影響力の大きさを認めた上で、それでもなお英語力が低い学生の内なる国際化意識を高めるために大学教育ができることは何かを模索していく。

2 先行研究の検討

本研究はカレッジ・インパクト研究と異文化間教育研究の2つに位置付けることができるだろう。カレッジ・インパクト研究において溝上(2009)は、全国の大学生を対象に質問紙調査を行い、1週間の大学生活の過ごし方から、それぞれの学生生活の充実感や知識・技能の獲得状況を分析している。それによると、近年言われている学生の「まじめ化」は授業内での学習時間の増加すなわち授業への出席率の上昇を示しているのであり、実際に知識・技能を身に付けているのは、授業内/外の学習をバランスよく行っている学生である。また課外活動への取り組みなど一見授業とは関係ない活動が、授業での知識・技能の獲得にプラスの影響を与えているという。この研究は、国際教育にかかわらず大学教育一般について分析したものであるが、大学内/外の教育機会を有機的に結びつける意義を指摘しているものとして非常に重要である。

一方で異文化間教育研究において、「内なる国際化」が軽視されているという筆者と同様の問題関心を持つ山田(2009)は、「21世紀型市民」に必須の教養として、多文化・異文化を理解し柔軟に対応できる知識・技能、すなわち「異文化間リテラシー」を提示している。これは「グローバル化した世界市場のなかでの国際競争力を持った人材」と「さまざまな文化という事象を多文化・異文化の視点から捉えられる」という2つの要素に分類できるが、後者の「内なる国際化意識」的なリテラシーが、他国と比較して日本の政策における課題だと指摘している。そして後者に関連する教育方法として山田は、知識のみに偏るのではなく「実践と個人の内面の省察へと結び付けていく」ことの重要性を述べている¹⁾。

以上を踏まえて本研究では、カレッジ・インパクト研究と異文化間教育研究のそれぞれのよさを生かしながら大学生の国際意識を分析する。近年のキーワードである、大学生活の「多様

性」を踏まえながら、異文化間教育の目標でもある「多文化共生社会」の実現に少しでも近づいていきたい。

3 仮説

本稿における前提の確認として、仮説1では英語力と内なる国際化意識との相関関係をみる。早矢仕(2009)が指摘するように、「国際性=英語力」の固定観念にとらわれる学生が多いため、英語力が低い学生は内なる国際化意識が低いことが容易に想像される。

- 理論仮説1：英語力の高い人ほど、内なる国際化意識が高い。
- 作業仮説1-1：英語力スコアが高い学生ほど、海外の歴史や文化への興味が高い。
- 作業仮説1-2：英語力スコアが高い学生ほど、外国人と抵抗なく交流できる。

仮説2・3では、「外国語の授業」と「国際関係の授業」を大学の国際教育ととらえ、これらが内なる国際化意識に与える効果の、学生の英語力による違いを分析する²⁾。大学の国際教育では、身の回りやメディアで見られるような身近な国際問題を取り上げることも多く、内なる国際化意識に何らかの効果があることは予想される。しかしながら前述の早矢仕の指摘を踏まえると、英語力の低い層にとっては国際教育が海外への興味や外国人への寛容性といった点に結び付かず、内なる国際化意識を高めることには繋がらないのではないか。そのような国際教育の限界を指摘したい。

- 理論仮説2：大学の国際教育を多く受けているほど、内なる国際化意識が高い。
- 作業仮説2-1：外国語の授業をたくさん受けているほど、海外の歴史や文化への興味が高い。
- 作業仮説2-2：外国語の授業をたくさん受けているほど、外国人と抵抗なく交流できる。
- 作業仮説2-3：現代の国際関係に関して学ぶ授業をたくさん受けているほど、海外の歴史や文化への興味が高い。
- 作業仮説2-4：現代の国際関係に関して学ぶ授業をたくさん受けているほど、外国人と抵抗なく交流できる。

- 理論仮説3：英語力が高い人においては、大学の国際教育を多く受けているほど、内なる国際意識が高いが、英語力が低い人においては、相関がみられない。
- 作業仮説3-1：英語力スコア上位層においては、外国語の授業をたくさん受けているほど、海外の歴史や文化への興味は高いが、英語力スコア下位層においては、相関がみられない。
- 作業仮説3-2：英語力スコア上位層においては、外国語の授業をたくさん受けているほど、外国人と抵抗なく交流できるが、英語力スコア下位層においては、相関がみられない。
- 作業仮説3-3：英語力スコア上位層においては、国際関係の授業をたくさん受けているほど、海外の歴史や文化への興味は高いが、英語力スコア下位層においては、相関がみられない。
- 作業仮説3-4：英語力スコア上位層においては、国際関係の授業をたくさん受けているほど、外国人と抵抗なく交流できるが、英語力スコア下位層においては、相関がみられない。

仮説 2・3 では、英語力の低い学生には親和性が低い従来の国際教育の現状を指摘したが、それを踏まえ Tsuneyoshi (2010) の指摘する<日本人/外国人>という二分的な枠組みを越えた内なる国際化意識を持つためには、何が必要なのだろうか。理論仮説 4 では、溝上 (2009) の知見を踏まえ「経験の多様性」という概念を提起したい。大学の内/外で学問やそれ以外の活動を経験し、様々な人やものに関わり様々な価値観に触れることで、多文化を受け入れる素地ができ、内なる国際化意識を高めることが必要ではないだろうか。

- 理論仮説 4：特に英語力が低い人において、経験の多様性が高いほど、内なる国際化意識が高い。
- 作業仮説 4-1：経験の多様性スコアが高いほど、海外の歴史や文化への興味が高い。
- 作業仮説 4-2：経験の多様性スコアが高いほど、外国人と抵抗なく交流できる。
- 作業仮説 4-3：特に英語力スコア下位層において、経験の多様性スコアが高いほど、海外の歴史や文化への興味が高い。
- 作業仮説 4-4：特に英語力スコア下位層において、経験の多様性スコアが高いほど、外国人と抵抗なく交流できる。

以上の議論を踏まえて仮説 5 では、大学教育に実践的な対応策を提示するために、協力型授業を取り上げ、それが内なる国際化意識に与える効果を分析する。この授業を選んだ理由は、異文化間教育研究の文脈における「実践と個人の内面の省察へと結び付けていく」(山田 2009) アプローチや、カレッジ・インパクト研究の文脈における「キャリア教育と正課教育との有機的な連携」(溝上 2009) といった要素を盛り込みやすい授業形態であり、本研究の知見を生かして比較的容易に大学教育の改善に結び付けられるからである。

- 理論仮説 5：特に英語力が低い人において、協力型授業を受けているほど、内なる国際化意識が高い。
- 作業仮説 5-1：特に英語力スコア下位層において、他人と協力して研究や作業を進める授業を受けているほど、海外の歴史や文化への興味が高い。
- 作業仮説 5-2：特に英語力スコア下位層において、他人と協力して研究や作業を進める授業を受けているほど、外国人と抵抗なく交流できる。

4 変数の設定

- ①英語力スコア：Q10A「英会話力」(「まったく話すことができない」～「議論ができる」)と Q10B「英語読解力」(「まったく理解できない」～「英語の本や英字新聞を理解できる」)を得点化して合成変数を作ることで、より総合的な英語力の指標に設定した。Q10A と Q10B の少なくともどちらか 1 つで「1」と回答すれば「下位」(全体の 16.3%)、Q10A と Q10B のどちらも「2」と回答すれば「中位」(同 50.2%)、それ以外を「上位」とした(同 33.4%)。
- ②外国語の授業：Q04G「外国語(英語・第二外国語など)の授業」を用いた。「たくさん受けた」を「たくさん受けた」、「少し受けた」と「受けたことがない」を「あまり受けていない」にリコードした。度数分布を考慮して、他の授業変数とは違い「たくさん受けた」と「少し

受けた」の間で線引きをした。

- ③国際関係の授業：Q04J「現代の国際政治・経済や特定の国・地域に関して学ぶ授業」を用いて、②と同様の処理をした。
- ④内なる国際化意識：前述の『学士課程教育の再構築に向けて』を整理した山田（2009）を参考に、「21世紀型市民」に必要と考えられる「内なる国際化意識」を、以下の2つの面ではかる。1つ目はQ45E「海外の歴史や文化に興味がある」（「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を「高い」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」を「低い」にリコード）であり、2つ目はQ45G「国籍や母国語が違う人とも抵抗なく交流できる」（「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を「できる」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」を「できない」にリコード）である³⁾。
- ⑤経験の多様性スコア：Q23「学期中における1週間の平均的な生活時間」の内、Q23A「授業への出席」、Q23B「授業に関係する学習」、Q23C「授業とは関係のない学習」、Q23D「読書（マンガ・一般雑誌を除く）」、Q23E「部・サークル活動」、Q23F「アルバイト」の6つを得点化して合成した。合成に際しては、まずQ23A～Fそれぞれにおいて、回答の分布状況をもとに分布が均等になるように2点尺度を作成した。それらを足し合わせて合計7段階の連続変数とし（後に「経験の多様性得点」としてロジスティック回帰分析に使用）、分布が均等になるよう2点尺度に分類して4～7点を「（経験の多様性スコアが）高い」、1～3点を「低い」とそれぞれリコードした。本稿では単純に1つの項目に多くの時間を費やすよりも、広く様々なことに取り組む学生を抽出するために、単純に各変数の得点を合計するのではなく、上記のような2段階の合成を行った。
- ⑥協力型授業：Q04C「他人と協力して研究や作業を進める授業」を用いて、「たくさん受けた」と「少し受けた」を「受けた」、「受けたことがない」を「受けていない」にリコードした。

なお、本稿は「日本人の国際意識」を分析するものであるため、留学生を対象から除外している。

5 分析

5.1 理論仮説1の検証：英語力と内なる国際化意識の関連

理論仮説1を検証する。まず作業仮説1-1において、英語力と海外の歴史や文化への興味との関連をみる。表1左より0.1%水準で有意な正の相関がみられる。よって作業仮説1-1は支

表1 英語力スコア×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

英語力スコア	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
	高い	低い			できる	できない		
上位（%）	65.5	34.5	100.0	(537)	57.8	42.2	100.0	(538)
中位（%）	46.7	53.3	100.0	(803)	45.0	55.0	100.0	(804)
下位（%）	35.0	65.0	100.0	(263)	30.2	69.8	100.0	(262)
合計（%）	51.1	48.9	100.0	(1602)	46.9	53.1	100.0	(1604)
				ガンマ係数：0.371				
				0.1%水準で有意 p=0.000	ガンマ係数：0.317			
					0.1%水準で有意 p=0.000			

持された。次に作業仮説 1-2 において、外国人と抵抗なく交流に焦点をあてる。表 1 右より 0.1% 水準で有意な正の相関がみられる。よって作業仮説 1-2 は支持された。したがって理論仮説 1 は全面的に支持された。

5.2 理論仮説 2 の検証：大学の国際教育と内なる国際化意識の関連

理論仮説 2 を検証する。まず作業仮説 2-1 と 2-2 においては、外国語の授業を独立変数に設定する。作業仮説 2-1 では、海外の歴史や文化への興味に着目する。表 2 左より外国語の授業と海外の歴史や文化への興味は 0.1% 水準で正の相関がみられ、作業仮説 2-1 は支持された。作業仮説 2-2 では、外国人と抵抗なく交流に着目する。表 2 右より 0.1% 水準で正の相関がみられ、作業仮説 2-2 は支持された。

作業仮説 2-3 と 2-4 においては国際関係の授業を独立変数に設定する。作業仮説 2-1・2-2 と同様にして、表 3 より、作業仮説 2-3・2-4 は支持されていることがわかる。したがって、理論仮説 2 は全面的に支持された。ただし、表 2 と表 3 のガンマ係数を表 1 と比べてみると、従属変数がいずれの場合も表 1 の方が大きい。よって、外国語の授業や国際関係の授業は、内なる国際化意識に対する効果が英語力ほど大きくはないことがわかる。

5.3 理論仮説 3 の検証：英語力と大学の国際教育と内なる国際化意識の関連

理論仮説 3 を検証する。大学の国際教育が与える効果に対して英語力の及ぼす影響を検証するため、英語力スコアを統制変数に設定する。まず作業仮説 3-1 と 3-2 においては、外国語の授業を独立変数に設定する。作業仮説 3-1 では、海外の歴史や文化への興味に着目する。表 4

表 2 外国語の授業×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

外国語の授業	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
	高い	低い			できる	できない		
たくさん受けた (%)	55.8	44.2	100.0	(838)	51.8	48.2	100.0	(840)
あまり受けていない (%)	45.7	54.3	100.0	(763)	41.4	58.6	100.0	(763)
合計 (%)	51.0	49.0	100.0	(1601)	46.8	53.2	100.0	(1603)
				ガンマ係数 : 0.200 0.1%水準で有意 p=0.000	ガンマ係数 : 0.206 0.1%水準で有意 p=0.000			

表 3 国際関係の授業×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

国際関係の授業	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
	高い	低い			できる	できない		
たくさん受けた (%)	56.7	43.3	100.0	(413)	52.8	47.2	100.0	(415)
あまり受けていない (%)	49.2	50.8	100.0	(1189)	44.8	55.2	100.0	(1189)
合計 (%)	51.1	48.9	100.0	(1602)	46.9	53.1	100.0	(1604)
				ガンマ係数 : 0.149 1%水準で有意 p=0.009	ガンマ係数 : 0.158 1%水準で有意 p=0.005			

左より、英語力スコアの上位層においては1%水準で正の相関がみられるが、英語力スコアの下位層においては有意な相関がみられず、むしろやや負の相関がみられる。よって作業仮説3-1は支持された。作業仮説3-2では、外国人と抵抗なく交流に着目する。表4右より、英語力スコアの上位層においては5%水準で正の相関がみられるが、英語力スコアの下位層においては有意な相関がみられない。よって作業仮説3-2も支持された。

作業仮説3-3と3-4においては国際関係の授業を独立変数に設定する。作業仮説3-3では、海外の歴史や文化への興味に着目する。表5左より、英語力スコアの上位層においては10%水準で正の相関がみられるが、英語力スコアの下位層においては有意な相関がみられず、むしろやや負の相関がみられる。よって作業仮説3-3は支持された。同様に表5右より作業仮説3-4も支持された。

以上の理論仮説2・3における分析より、大学の国際教育が内なる国際化意識に与える影響が、学生の英語力により大きく異なることがわかった。すなわち、英語力の高い層では外国語の授業が内なる国際化意識に対して効果があるが、英語力の低い層では外国語の授業・国際関係の授業が内なる国際化意識にほとんど効果を持たないのである。ただし、クロス表の結果から必ずしも上記のような因果関係を主張することはできないため、1つの解釈の可能性として因果関係を措定していることには注意が必要である。繰り返しになるが、国際的なキャリア志向が強い学生の「外向き」の国際意識が英語力に規定されるのは容易に想像がつくが、本稿で注目するような市民的な内なる国際化意識までもが、英語力に規定される要素が大きいという事実は、注目に値する。なお、以降の分析においては、対照的な違いをみせる英語力上位層と下位層に焦点をあてて分析する⁴⁾。

表4 英語力スコア×外国語の授業×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

Q10A・B×Q4G×Q45E、Q45G

英語力スコア	外国語の授業	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
		高い	低い			できる	できない		
上位	たくさん受けた(%)	69.7	30.3	100.0	(346)	61.5	38.5	100.0	(348)
	あまり受けていない(%)	58.0	42.0	100.0	(188)	51.1	48.9	100.0	(188)
	合計(%)	65.5	34.5	100.0	(534)	57.8	42.2	100.0	(536)
ガンマ係数：0.249 1%水準で有意 p=0.007					ガンマ係数：0.210 5%水準で有意 p=0.020				
中位	たくさん受けた(%)	49.1	50.9	100.0	(405)	47.4	52.6	100.0	(405)
	あまり受けていない(%)	44.1	55.9	100.0	(395)	42.4	57.6	100.0	(396)
	合計(%)	46.6	53.4	100.0	(800)	44.9	55.1	100.0	(801)
ガンマ係数：0.102 有意差なし p=0.149					ガンマ係数：0.100 有意差なし p=0.156				
下位	たくさん受けた(%)	31.4	68.6	100.0	(86)	33.7	66.3	100.0	(86)
	あまり受けていない(%)	36.7	63.3	100.0	(177)	28.4	71.6	100.0	(176)
	合計(%)	35.0	65.0	100.0	(263)	30.2	69.8	100.0	(262)
ガンマ係数：-0.118 有意差なし p=0.395					ガンマ係数：0.124 有意差なし p=0.379				

表5 英語力スコア×国際関係の授業×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

Q10A・B×Q4J×Q45E、Q45G

英語力スコア	国際関係の授業	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
		高い	低い			できる	できない		
上位	たくさん受けた(%)	71.5	28.5	100.0	(137)	66.9	33.1	100.0	(139)
	あまり受けていない(%)	63.4	36.6	100.0	(399)	54.6	45.4	100.0	(399)
	合計(%)	65.5	34.5	100.0	(536)	57.8	42.2	100.0	(538)
ガンマ係数：0.184 10%水準で有意 p=0.084						ガンマ係数：0.253 5%水準で有意 p=0.012			
中位	たくさん受けた(%)	52.8	47.2	100.0	(218)	50.0	50.0	100.0	(218)
	あまり受けていない(%)	44.3	55.7	100.0	(584)	43.1	56.9	100.0	(585)
	合計(%)	46.6	53.4	100.0	(802)	45.0	55.0	100.0	(803)
ガンマ係数：0.167 5%水準で有意 p=0.034						ガンマ係数：0.138 10%水準で有意 p=0.079			
下位	たくさん受けた(%)	35.1	64.9	100.0	(57)	28.1	71.9	100.0	(57)
	あまり受けていない(%)	35.5	64.5	100.0	(203)	30.7	69.3	100.0	(202)
	合計(%)	35.4	64.6	100.0	(260)	30.1	69.9	100.0	(259)
ガンマ係数：-0.008 有意差なし p=0.958						ガンマ係数：-0.063 有意差なし p=0.703			

5.4 理論仮説4の検証：経験の多様性と内なる国際化意識の関連

理論仮説4を検証する。まず作業仮説4-1と4-2では、経験の多様性スコアと内なる国際化意識との直接的な関連をみる。表6左より0.1%水準で正の相関がみられ、作業仮説4-1は支持された。同様に表6右より作業仮説4-2も支持された。

次に経験の多様性の効果の違いを英語力の高低によって検証するために、英語力スコアを統制変数に設定して作業仮説4-3と4-4の分析を行う。作業仮説4-3では、海外の歴史や文化への興味に着目する。表7左より、英語力スコア下位層において5%水準で有意な正の相関がみられたが、英語力上位層においても同様に優位な正の相関が見られた。よって作業仮説4-3は部分的に支持された。同様に、外国人と抵抗なく交流に着目した作業仮説4-4は、英語力下位層のみで支持された。これまで同じような傾向を見せていた「海外への興味関心」と「外国人と抵抗なく交流」が、「経験の多様性スコア」を変数に投入することで対照的な傾向を見せることになった。本研究では紙幅の都合でこれ以上分析できないが、「経験の多様性」をより詳細に定義して分析することが、今後の研究に求められる。

ここで理論仮説1とも合わせて考えると、特に英語力スコア下位層において、経験の多様性が内なる国際化意識の向上に繋がり、かつ英語力と内なる国際化意識との結びつきを弱める、といえるだろう。すなわち、自分の知らない分野の様々なことを学んだり様々な人とコミュニケーションを取ったりして多様な価値観に触れあう機会をもつ経験によって、海外に目を向けるようになり、また語学力が大きな障壁となっている外国人とのコミュニケーションも気軽にできるようになるのである⁵⁾。

表 6 経験の多様性スコア×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

Q23A~F×Q45E、Q45G

経験の多様性スコア	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
	高い	低い			できる	できない		
	高い (%)	57.9	42.1	100.0	(944)	50.7	49.3	100.0
低い (%)	40.7	59.3	100.0	(592)	41.7	58.3	100.0	(592)
合計 (%)	51.3	48.7	100.0	(1536)	47.2	52.8	100.0	(1537)
ガンマ係数 : 0.335 0.1%水準で有意 p=0.000					ガンマ係数 : 0.179 0.1%水準で有意 p=0.001			

表 7 英語力スコア×経験の多様性スコア×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

Q10A・B×Q23A~F×Q45E、Q45G

英語力スコア	経験の多様性スコア	海外への興味関心		合計	N	外国人と抵抗なく交流		合計	N
		高い	低い			できる	できない		
		上位	高い (%)	69.0	31.0	100.0	(377)	59.6	40.4
	低い (%)	58.3	41.7	100.0	(139)	54.0	46.0	100.0	(139)
	合計 (%)	66.1	33.9	100.0	(516)	58.1	41.9	100.0	(518)
ガンマ係数 : 0.228 5%水準で有意 p=0.023					ガンマ係数 : 0.115 有意差なし p=0.246				
中位	高い (%)	52.8	47.2	100.0	(439)	46.9	53.1	100.0	(439)
	低い (%)	38.1	61.9	100.0	(328)	43.0	57.0	100.0	(328)
	合計 (%)	46.5	53.5	100.0	(767)	45.2	54.8	100.0	(767)
ガンマ係数 : 0.291 0.1%水準で有意 p=0.000					ガンマ係数 : 0.079 有意差なし p=0.278				
下位	高い (%)	42.4	57.6	100.0	(125)	36.3	63.7	100.0	(124)
	低い (%)	28.2	71.8	100.0	(124)	25.0	75.0	100.0	(124)
	合計 (%)	35.3	64.7	100.0	(249)	30.6	69.4	100.0	(248)
ガンマ係数 : 0.304 5%水準で有意 p=0.019					ガンマ係数 : 0.262 10%水準で有意 p=0.054				

5.5 理論仮説 5 の検証：協力型授業と内なる国際化意識の関連

次に、理論仮説 5 を検証する。表 8 左は、英語力スコア別で、協力型授業を受けた人のうち、海外の歴史や文化への興味が高い人の割合をみたものである。英語力スコアの下位層をみると、5%水準で有意な結果が得られた。よって作業仮説 5-1 は支持された。同様に表 8 右より、5%水準で作業仮説 5-2 は支持された。またガンマ係数が高いことから、英語力スコア下位層において協力型授業と内なる国際化意識との関連は強いことがわかる。よって、理論仮説 5 は支持された。協力型授業には、様々な人や知識に触れる中で、相手の立場にたって物事を考えたり、様々な価値観を受け入れたりするという「経験の多様性」の要素が含まれていると推測される。ただしこれはあくまで授業形態を問うたものであり、その内容にまで踏み込んだ分析とはなっていないため、これだけで協力型授業を導入すればいいという結論は早計である。山田 (2009) の言葉を借りれば、協力型授業のような「実践」を踏まえて、「個人の内面の省察」へと繋がるテーマ設定や教員による働きかけが求められるのではないだろうか。

表8 英語力スコア×協力型授業×海外の歴史や文化への興味、外国人と抵抗なく交流

Q10A・B×Q4C×Q45E、Q45G

英語力 スコア	協力型授業	海外への 興味関心		合計	N	外国人と 抵抗なく交流		合計	N
		高い	低い			できる	できない		
		上位	受けた (%)			67.1	32.9		
	受けていない (%)	62.6	37.4	100	(131)	55.7	44.3	100	(131)
	合計 (%)	66.0	34.0	100	(529)	57.8	42.2	100	(531)
ガンマ係数：0.104 有意差なし p=0.347						ガンマ係数：0.057 有意差なし p=0.577			
中位	受けた (%)	47.6	52.4	100	(552)	48.2	51.8	100	(552)
	受けていない (%)	43.8	56.2	100	(233)	37.6	62.4	100	(234)
	合計 (%)	46.5	53.5	100	(785)	45.0	55.0	100	(786)
ガンマ係数：0.078 有意差なし p=0.321						ガンマ係数：0.214 5%水準で有意 p=0.006			
下位	受けた (%)	40.1	59.9	100	(177)	34.1	65.9	100	(176)
	受けていない (%)	25.3	74.7	100	(83)	21.7	78.3	100	(83)
	合計 (%)	35.4	64.6	100	(260)	30.1	69.9	100	(259)
ガンマ係数：0.328 5%水準で有意 p=0.020						ガンマ係数：0.303 5%水準で有意 p=0.042			

6 結論

これまでの分析結果は、次の3点にまとめることができる。

第1に、先行研究でも見られたように、やはり日本人にとって英語と国際意識との結びつきは強い。国際的なキャリアを志向するような外向きの国際意識だけでなく内なる国際化意識さえも、学生の英語力の高低によって大きな差が出る。内なる国際化は「多文化共生」のキーワードであるが (Tsuneyoshi 2010)、1つの価値尺度に囚われない多様性を必要とする文脈にもかかわらず、日本人の内なる国際化意識が「英語力」の影響を強く受けているという事実は、繰り返し指摘する必要があるだろう。

第2に、大学の国際教育が内なる国際化意識に与える影響は、学生の英語力によって大きく異なる。英語力の高い層では国際教育が相乗効果をもたらすが、低い層ではあまり効果がない。したがって、現在の大学における国際教育は、特に英語力下位層の学生に対して、従来とは違ったアプローチの仕方が求められる。

第3に、特に英語力下位層への対応策として「経験の多様性」を高めることが挙げられる。大学内だけでなく課外活動も含めた経験、さらに踏み込んで言うならば大学内/外でのバランスのよい経験をすることが、多様な価値観に触れることを促し、内なる国際化意識を高めることに繋がりうる。現在大学で行われている授業の中では、協力型授業という授業形態が「経験の多様性」的な要素を含み、内なる国際化意識を高める役割を果たすと考えられる。したがって、これらの授業に多文化共生のテーマを盛り込むなど、多様な価値観のせめぎ合いとその融和を可能とするような授業デザインの工夫が求められる。

最後に今後の課題として2点提示する。1点目は、経験の多様性を高めるための授業「内容」

の検討である。すでに指摘したが、本稿では具体的な授業「形態」の改善策の提示にとどまった。したがって、前述のような日本人の英語や外国人に対する意識を踏まえて、経験の多様性を高めるための授業内容を考えていく必要があるだろう。2点目は、本研究において授業の直接の効果を厳密に分析できなかったことである。これはある1時点を切り取って行う質問紙調査の限界であり、まだ体系的な分析手法が確立していない大学の教育効果研究全体の課題でもある。これらの課題を踏まえて、今日的な課題である多文化共生社会の実現に向けて、より実践的な知見が積み重ねられていくことを切に願う。

<注>

- 1) 管見の限りでは、大学の国際教育について実証的に研究したものはあまりなく、例えばシラバスを使っでの分析を行った松浦（2006）もその分析手法が確立していない。
- 2) この2つを「大学の国際教育」として扱う理由は以下の通りである。外国語の授業は多くの大学で必修であり、国際関係の授業は一般教養として多くの学生に触れられる可能性が高い（本調査の対象者では、外国語の授業を少なくとも1回は受けたことのある学生が全体の98.6%、国際関係の授業は83.1%であった）。
- 3) 様々な定義される国際意識の中でも本研究では「内なる国際化意識」に焦点をあてるため、Q39H「外国人の上司や経営者のもとで働いてもよい」やQ45F「国際的なキャリアを積みたい」といった「外向き」の国際意識は変数として扱わない。
- 4) 今回の分析では、全体の50%を占めこれ以上の細かい分類ができない英語力中位層（Q10A「英語力」で「2. 簡単な挨拶ならば一言二言できる」、Q10B「英語読解力」で「2. 簡単に短い文章ならば理解できる」と答えた学生のみが該当）については触れない。
- 5) ここで反論として、経験の多様性の高さや内なる国際化意識の高さが見られるのは、もともと自主的・主体的な学生だからではないか、という「自主性」因子による擬似相関が考えられる。そこで「経験の多様性得点」や「Q09D 自主性」を独立変数として組み込み、英語力下位層に限定して、内なる国際化意識を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った（その他の独立変数は、「外国語の授業」、「国際関係の授業」、「大学入試難易度」、「経済階層」、「文化階層」である）。その結果、「経験の多様性得点」は10%以内の水準で有意となった。したがって、学生が自主的・主体的であるか否かにかかわらず、経験の多様性の高い学生が内なる国際化意識も高いことがわかる。またこの分析から、大学の選抜性の高低にも関係なく経験の多様性が効果的であることがわかる。

<引用文献>

- 早矢仕彩子、2009、「大学生の国際性意識に関する研究」『現代教育学部紀要』1: 141-55.
- 松浦真理、2006、「異文化間教育に関する授業の現状と課題——異文化間教育学会のアンケートの分析を手がかりに」『異文化間教育』23:84-94.
- 溝上慎一、2009、「『大学生生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討——正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』15:107-18.
- Reischauer, Edwin, 2004, *The Meaning of Internationalization: Practical Advice for a Connected planet*, Tokyo; Rutland, Vt.: Tuttle.
- Tsuneyoshi, R, 2010, *The 'new' foreigners and the social reconstruction of difference: The cultural diversification of Japanese education*, Ryoko Tsuneyoshi, Kaori H. Okano and Sarane Spence Boocock eds., *Minorities and Education in Multicultural Japan: An interactive perspective*, Routledge Taylor & Francis Group, 149-72.
- 山田礼子、2009、「多文化共生社会をめざして——異文化間教育の政策課題」『異文化間教育』30:12-24.
- 矢野暢、1986、『国際化の意味——いま「国家」を超えて』NHK 出版.